

A close-up photograph of a carbon fiber case, likely for a camera or lens. The case is made of a dark, woven carbon fiber material with a repeating diamond pattern. It is attached to a black leather strap with two silver metal fasteners. The lighting is dramatic, highlighting the texture of the carbon fiber and the smooth surface of the leather. The background is dark and out of focus.

“F 10th Anniversary”

Carbon Attache Case





伝統とは文化を積み重ねていくことで生まれ 匠は伝統のなかでこそ鍛えられる

日本における鞆の原型のひとつに柳行李があります。乾燥させたコリヤナギの皮を編んだ籠で、起源は奈良時代といわれています。当時は貴族が用いる品でしたが、時代が江戸に移ると庶民へと広まり、衣類や身の回りの小物をしまう衣装箱として、弁当箱や旅商人の鞆として日本人の暮らしを支える道具になりました。

兵庫県豊岡市は柊柳細工発祥の地で、千年以上に

渡って柳行李を作り続けてきた町です。現在では『豊岡鞆』という名が冠された上質な鞆でその文化を継承しています。

一八二四年に創業した『エンドー鞆』は、豊岡の地で技を磨き、深めた知を二百年近くに渡り継承してきた匠です。今、貴方のお手元にあるカーボン製アタッシュケースは、このような文化を背景に生まれ、エンドー鞆の伝統を受け継ぐ職人が、さらに技を

究めんと発足した工房『嘉玄』の匠によって作り出された鞆です。

人々の暮らしを豊かにすることは文化の役割で、いつの時代も文化は匠たちの丁寧な仕事によって生まれてきました。そして、文化を次世代へつないでいき、伝統とするのもやはり匠の仕事なのでしょう。

“F 10th Anniversary” は、そのような伝統へ通じるマイルストーンなのです。

嘉玄 BAGS ATELIER **KAGEN**
ESTABLISHED IN 1824

エンドー鞆株式会社 鞆工房『嘉玄 (Kagen)』
兵庫県豊岡市元町 2-5
www.atelier-kagen.jp





時代によって素材も用途も変遷してきたが より優れたものを求めて技と知を磨くことは不変だ

俗に“カーボン”と呼ばれる素材のことはすでにご存知でしょう。石油原料のアクリルやピッチの繊維を高温で炭化させ、樹脂で硬めたものです。金属よりも軽くて丈夫、腐食しない特性は宇宙航空や自動車産業で活用され、現代科学の粋を極めた“先端材料”と呼ばれています。

しかし、粘性素材に繊維を複合させて硬化させ、強度と剛性を高めた素材は、初期エジプトの煉瓦にも

みられるほど歴史が古く、その意味においては伝統の技法ともいえます。日本では飛鳥時代から平安時代にかけて“脱活乾漆造”として定着し、麻布と漆で作られた不空羅索観音立像は東大寺に今も保存されています。

『トラス』は、カーボンファイバー強化プラスチック(CFRP)の成形に長け、高精度かつ機能美に溢れる製品を作り出す匠です。とくに、直径5~7μmという

髪の毛の十分の一に満たない炭素繊維の一本一本が作り出す織目の美しさを表現した製品づくりにおいて、海外でも高く評価される技法を生み出してきました。

伝統の工法を駆使しながら、革新的な素材や加工技術を用い、より優れたものを求めて工業製品の新しいかたちを模索して未来を切り拓く。“F”の概念も、まさしくここにあるのです。

Tras carbon

有限会社 トラス
静岡県沼津市志下 74-4
www.tras.co.jp



ここから“F”が始まった

“F” 誕生以前の 2004 年
IS300 にレース仕様 5.2ℓ V8 エンジンを搭載するため
シャシーを強化してフード等をカーボン化した
コンセプトモデルが登場した

常識を超えて挑戦する“F”のスピリットは
すべてここからはじまっている

伝統と革新によってこれまで誰も作れなかった 最先端のアタッシュケースが誕生した

鞆の匠エンドー鞆『嘉玄』と、先端素材の匠『トラス』。どちらの匠も伝統を大切にしながら、より豊かな未来を見つめ、人々と生活様式を一変させるほど画期的で革新的なものづくりを目指していることにちがいはありません。

それは私たちレクサスも同様です。先人が培ってきた技と知を受け継ぎながら、より優れたものを求めてたゆまぬ探究心を持ってものづくりに励んでまいりました。

そうした思念や哲学ともいうべき姿勢は、いつのまにか私たちに縁をもたらしていたのです。

嘉玄の母体であるエンドー鞆は、レクサスコレクションのうちいくつかのバッグの設計と製造を手がけています。互いが矜持としているクラフトマンシップが共鳴したからに他なりません。

また、エンドー鞆の代表である遠藤玄一郎はかねてよりレクサスオーナーでもあります。仕事や余暇を問わずレクサスを走らせているのも偶然ではなく、ものづくりを究めんとする心が引き寄せた縁なのでしょう。

いっぽうで、トラスは“F”と深い縁があります。世界一過酷といわれるドイツ中部にあるサーキット、ニュルブルクリンクで開催される年間10戦の耐久レース『VLNニュルブルクリンク耐久シリーズ』SP8クラスで、3年連続シリーズチャンピオンに輝いたLEXUS IS F CCS-R。このレース車両やRC Fレース車両に装着されているカーボン製パーツを製作しているのがトラスなのです。レクサス、そして“F”とともにクルマの未来を信じ、理想と究極を追い求めてきたのです。

今、貴方が手にしているカーボン製アタッシュ

ケースは、こうした縁がかたちになったものです。レクサスのクラフトマンシップ、そして“F”が追求してきた可能性への飽くなき挑戦が、鞆とカーボンの匠を引き寄せ、それぞれの技と知が融合したことで生まれた結晶なのです。

鞆の匠とカーボンの匠。それぞれの丁寧な仕事、本革とカーボンを融合させたこのカーボン製アタッシュケースは、世界的にみてもめずらしいものです。その理由はそれぞれの素材の優れた特性にあります。

嘉玄を率いる荒田守は、天然繊維や化学繊維、革といった材料を切り出し、繊細な縫製でそれらをひとつにする匠です。しかし匠の技術をもってしても、カーボンのような硬い材料と、柔軟性に富む本革をつなぎ合わせることはむずかしいのです。

もちろん、継ぎ合わせることは不可能ではありません。カーボンと革を無骨に合わせるだけなら、方法はいくらかもあります。ですが、そこに美しさを見出すことはできませんし、美しく仕上げられないならカーボンと革を融合させる意味もありません。だから多くの職人はやりたがらず、カーボンと革を融合させたアタッシュケースはこれまでこの世に存在しなかったのです。(※) 実のところ、今回のプロダクトを打診したいいくつかの工房は、この革新的なアタッシュケースの製作——いわば匠としての挑戦を受けなかったのです。

しかし荒田は違いました。誰もやらないことに挑み、成功させることこそ匠としての腕の見せどころである、これまでに培った技と知を駆使しつつ、新たな技法と知見を生み出す好機、とばかりにカーボン製アタッシュケースの製作に取りかかりました。

トラスを率いる新田正直は、カーボンの織目の美しさにこだわる匠です。その象徴ともいえるのが、

カーボン製アタッシュケースのシェルに浮かび上がっている“F”ロゴです。工数や仕上がりの美しさを考慮すれば、メタルバッジを貼り付けたり、ペイントで仕上げるのが常套手段です。

しかし新田はそのような安易な手法を選びませんでした。誰もやらない、できないことに挑み、かたちにしてこそ製品である、そういわんばかりに、トラスの叡智と技術を結集したのです。直径や材質、そして織目の異なる炭素繊維を複合的に、光が当たる角度を計算して貼り合わせることで、“F”を見事に浮かび上がらせたのです。

豊岡が大正時代を迎えたとき、すでに日本へ伝わっていた西洋文化に影響を受け、柳行李は持ち手と錠前を備えたトランク型へと進化していました。しかも漆が全面に塗られ、丈夫さと軽さを備えた画期的な鞆です。平成の今、それは大きく進化しました。

カーボン製アタッシュケースは、嘉玄とトラス、そしてレクサス“F”が追い求める伝統と革新の鞆です。およそ二百年の時を重ねてきた嘉玄の伝統が、先端材料による強化素材製品を追求しているトラスの革新と融合することで既成概念を打ち破ったのです。いわば時代の最先端をかたちにした、進化と革新に満ちた鞆、それがカーボン製アタッシュケースなのです。

“F 10th Anniversary”を記念して作ったこのカーボン製アタッシュケースを、まずはじっくりと眺め、指先で触れ、質感を味わってください。匠たちのクラフトマンシップが作り出した伝統と革新の結晶が、貴方の好奇心にとって刺激となり、生活様式を一変させるような新たな体験をもたらすことを願っております。





10th Anniversary